

「被災地救援・復興活動」と社会福祉協議会の「繋ぐ役割」に期待して

近年全国的に大きな自然災害が続発しております。地震、津波、山崩れ、水害、火山噴火等自然災害に対し、恐怖を感じるこの頃です。地震は、いつどこで、どのくらいの大きさで発生するかわかりません。また、台風は規模が大型化し、日本本土へ上陸すると必ず水害、家屋倒壊、山崩れ等の予想出来ない災害を引き起こしております。

さて、令和元年10月12日台風19号が関東に上陸したため、関東甲信に於いて甚大な被害をもたらしました。特に長野県の千曲川の氾濫と決壊は、近年誰も知りえない甚大な災害を引き起こしました。今後、当該被災地域にあっては、元の生活及び生産活動までに復興させるためには、何年かかるかわかりません。

去る11月5日、私は、東筑摩郡社会福祉協議会の呼びかけに応じまして、千曲川堤防決壊氾濫カ所の「穂保地区」へのボランティア活動に参加しました。ボランティアセンターの担当者の指示案内により現場へ向かったところ、どの家も家財は全くなく、床も全部撤去され、壁は落とされて、周辺は泥だらけ。言葉にも形容し難い状況ばかりでした。そんな中を、早速、床下の泥出し、物置・倉庫周りの片付け等の作業にあたりました。しかし、この日は、被災から時間も経過していたためか、家の中の泥等も大部分は片づけられ多少落ち着いた様子もうかがえましたこと。また、何よりも、被災した方々のひた向きに努力をする姿を目の当たりにし、復興への兆しを大いに感ずることができました。

この地域は、有名な長野18号線アップルラインの沿線の集落で、リンゴ園が各家を取り巻いています。しかし、リンゴ園の畑の中には、30～40cmの泥が堆積し、倉庫の中のSS、高所作業車等はまるっきり水に浸かり、泥だらけの状態、使用不能の状態のまま放置されていました。また、収穫用のコンテナも泥だらけとなり、周辺のリンゴ農家は水洗いに追われていました。この地区は1m50cmくらいの高さまで水に浸かり、リンゴの枝には人の目線くらいの高さにゴミがついている状態で、その位置のリンゴの実も泥だらけで出荷不能とのこと。畑に堆積した泥により、収穫期に入ったリンゴのもぎ取りがどのように行われるか、心配とのことでした。

この集落の河川には、10数メートルの高さの堤防があり、その外側には目視で数十メートルの畑と林があり、その向かいに千曲川の本川があります。今回は、その位置より下流側の川幅の狭いところで決壊が発生して、その水が一挙に穂保地区全域に流れ込み、深いところでは1m70cmの水が押し寄せたとのこと。私が参加したボランティア当日の様子からは、その時の流水がどんな状況であったのかを想像することが全くできませんでした。堤防の上面には数メートルの幅で道路があり、その脇の空き地には災害ゴミの山が人間の背丈くらい積まれた状態となっていました。一刻も早くその災害ゴミが片付けられるよう願うばかりでありました。

千曲川は、塩尻・松本平・東信・北信の各川が合流して千曲川となり、最後には信濃川として海へと流れる川です。長野県内では最大の川です。今回災害のあったときのその地域の雨量は、それほどの集中豪雨ではなかったと地元の方がおっしゃっています。県内1/4位の地域の雨量が集中的に千曲川へ流れたため、この大災害が発生したと地元の方のお話も聞かれました。

災害に対して、第一に考えなくてはならないことは人身災害ですが、この地域では常日頃から防災訓練が行われ、また隣同士の支え合い助け合いにより避難誘導が速やかになされ、災害に対する心の準備がなされていたことが幸いしたようです。

さて、この大災害に対して救援活動・復旧活動に最大の力を発揮したのは、「公助活動」はもとより、ボランティアによる「共助活動」であると思います。地元の長野市、長野県はもとより県内市町村及び他県からも、社会福祉協議会等の組織を通じて、多くの方々の応援が得られ、着々と復旧活動が進められています。異口同音にボランティアから良く聞かれたのは「以前に被災したとき大変お世話になったから…」という言葉でした。今回被災した方々の心にどんなに温かく響いたことか——この地域にあっては、連休中は3000名、平日でも500名くらいのボランティアが活動されているとのことでした。

ボランティアセンターには、地元関係者は元より、全県からコーディネートを担当する社協職員等が派遣されて、被災者のニーズを把握・ボランティアの割り振りや誘導が行われています。ボランティアセンターの集合場所には、県内は元より他県（熊本、宮崎、広島、岡山、新潟、上越、富山等）の社協のベストを着用した団体又は個人。近隣の高校生たちも駆けつけていました。

ボランティアが作業をする道具は、センターの置き場に一輪車、スコップ、鋤簾、移植ごて、竹ぼうき、ブラシ等々泥出し及び清掃用具等が所狭しと置かれ、それも地元長野の物だけでなく広島・岡山・上越・富山等各県または県内高校などの名札のついた用具が用意されていました。そしてセンター横には、岡山県社協名の仮設トイレ5基程が設置されていました。こうした他県からの温かい支援に対しても心が打たれました。作業終了後、ボランティアセンターにはボランティアの皆さんの労をねぎらうために、炊き出しが実施されており、そこからは「ボランティア」も「その受け入れ側」も、復旧・復興に向けて気持ちが一つになっていることを容易にうかがうことができました。

私は、山形村社会福祉協議会の関係者として長く携わってまいりましたが、今回のことを振り返りますと、「社協としての立ち位置」やその「繋（つな）ぐ役割」について、自問自答をする機会を得ました。社協の「責務」やその「必要性」「重要性」をあらためて考えさせられた次第であります。

毎年各地で災害が発生しています。将来にわたって、自分たちの地域でいつどんな災害が発生するかもわかりません。「福（さいわい）」と「禍（わざわい）」が交錯する日々の生活の中であって、多くの地域住民から参画をいただき、住民相互の「支え合い」「助け合い」「共助」を基調とする社会福祉協議会の活動が、一層強化されていくことを期待するばかりであります

山形村赤十字奉仕団委員長
山形村社会福祉協議会理事
小林 昭 五